



ヨーロッパ地球物理学会第13回集会開かれる

1988年の3月21日から25日にかけて、イタリアのボローニャでヨーロッパ地球物理学会の第13回目の集会があった。これは、天文、気象、水象、地象を含めた広い範囲の学会連合に近いものである。数100人の出席者があり、一般講演、シンポジウム、作業部会などが9つの部屋で平行して行われた。

A.G. Wiin Nielsen が1988~1990年の会長となった。開会式の折りの挨拶の中に、ヨーロッパの学者は、ヨーロッパよりはアメリカでよく顔をあわせるが、この集りで知り合いとなり、連携をとるようにしたいものだという意味のことがあったのは印象的だった。

近年の課題についての関係者の集りという色彩が濃い。Wiin Nielsen の数値予報と予報の限界についての一般講演、大循環のモデリング、大気中のいろいろなスケールの現象の相互作用、大気内部波の低周波の物理、地震、津波、大気中層・高層の力学と化学、オゾン問題、古地磁気、彗星、海洋の大循環などがその例である。また、大陽活動と気象に関する問題についても、多

くの報告があった。

過去2000年程度の歴史的、測器的期間の気候変動に関するシンポジウムも行われた。R.S. Bradley と P.O. Jones がコンビーナーで、2日間にわたり、34の論文が読まれた。1人の持ち時間は約20分間で、実証的な研究成果の報告が多かった。木の年輪による分析結果もかなり多く報告された。日本ではあまりよい結果が出ていないが、気候特性の違いによるものだろうか。

これらの講演のうち、アメリカの極研究所の L. Thompson の報告はとくに興味があった。南部ペルーの高山の万年雪の氷の層には、降水の年変化にともない年輪が出来ている。これにより絶対年代がわかり、過去1500年くらいまでの年々の降水量が推定出来る。そして、気候変動が必ずしもなだらかに変化するだけではなく、時にはかなり急激に変化をすることもあるのがわかる。また、小氷期の状況もはっきりと検出できる。

(高橋浩一郎)

日本気象学会国際学術交流基金への募金のお願い

日本気象学会は、かねてから各国の気象関係組織および研究者との学術交流を図るため、国際学術交流基金を設けて、学会もしくは会員の学術交流の援助を目的とした活動を致しております。実施にあたっては、外国で開催される国際学術研究集会への会員の出席の補助、国際学術交流に貢献する事業の援助などです。

本来この基金は、少なくとも一千万円程度の元金があって、その利息で活動費をまかなうことを目標としていますが、現在のところ、その過渡期として、学会自身の年間予算から毎年約百万円を積み立て、並行した、わず

かの一般事業費と篤志による個人寄付金で活動を行っております。

基金の基礎を固めるためには、是非、会員の皆様からの御寄付をお願いします。理事会としては、さらには大口の団体寄付を仰ぐべく努力致す所存です。国際学術交流基金の趣旨を御理解いただき、11月号挿入の振替用紙を御利用の上、一口千円として、なるべく多くの御寄付をお願いします。

昭和63年9月

日本気象学会